
俺の足に賭けて

キー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の足に賭けて

【NZマーク】

NZ86335P

【作者名】

キー

【あらすじ】

学校内最速の、常時笑っている少年と。

取り得がないと思っている幼馴染の少女の。

恋物語。

(前書き)

あけまして。おめでとうございます。

この、『俺の足に賭けて』は連載中の『MY STORY』とは全く関係がありません。

お正月と言つことで、調子に乗つて短編を作つてみました。

完成度は低いと思われます。

自分が書きたいことを書いただけですから。

それでも、興味がある方は先に進んでください。

あなたに、ゴールテープを張つて待つている人は居ますか？

「速ツ！」

「あーあ、開始十秒でビリから一位だし」

「仕方ないよ、相手が光輝だもん」

「独走じやねえか。逆につまらん」

と、三者三様の意見を述べる私のクラスメイト達。

皆が話しているのは、白団の選抜リレーのアンカーについて。

彼の名は、真白光輝。

私のクラスメイトにして、幼馴染だ。

中学一年生。

「 もうゴールしてるし」

「笑顔でゴールかよ」

「先輩方が可哀想だね」

聞いての通り、足が速い。

彼は四百メートル走で全国大会に出場している。

入賞こそはしていないけど、それなりの実力を持っている。

学校内では、相手になる選手がない。

そういう訳で。

「今年は白団優勝か

「手加減しろ！！」

「今年もビリ……か」

他の団から不評が大発生する。

うちの学校の体育大会は走る種目が多い。

つまり。

まあ、光輝に入るチームが圧倒的に有利な訳。

「お疲れ」
「サンキュー」

余裕顔で控え場所に戻つてくる光輝。

勿論、白団メンバーが黙ってるはずも無く。

「よくやつたーーー！」

「優勝は目前だーーー！」

「お前のお陰だ！」

と、大盛り上がり。

しかし、当の本人は。

「……疲れた」

「その顔で言つても説得力ないよ」

「ばれた？」

「ばれたって、何それ？」

シシツと笑う。

太い眉毛が釣り上がる。

真っ黒くて、男子にしては長い髪。

細い眼。

私が言うのもなんだけど、イケメンではない。
正直に言つ。

ブサイクだ。

「俺、いま酷い事言われた気がする」
「気のせいだよ」

なんて言いながらブルーシートに腰掛ける。

隣に私も腰掛ける。

そんなブサイクな光輝だけど、何故か女子にはモテる。

足が速いだけのこんな男の何処がいいんだろうか？

理解不能だ。

「なんだか胸が痛いんだけど？」

「疲れたんだよ」

光輝は告白はされたことが結構ある。

何故私が知ってるかは、恥ずかしげも無くこいつが私にペラペラと喋るからだ。

恥じらいを持って。

断る理由については、教えてくれない。

誤魔化される。

「ん？」

「（……何、あの女）」

「（光輝君にベッタリじゃない）」

何人かの女子のひそひそ話が聞こえてきた。

思わず、ため息を吐く。

とにかく、これ以上ここつの横に居ると良くない。

タイミングよく。

「おい、光輝！ 次も頼むぞ！…」

「分かりました。頑張ります」

団長がやって來たので、それをとその場から離れた。

「あー疲れた」

「嘘付け、全然全力じゃなかつたくせに」

「…」

幼馴染、つまり家も近い。
と、言うか隣だし。

「全力じゃないんじゃない」

「え？」

「全力が出ないんだ」

隣を歩く光輝の顔を覗き込めば、暗かつた。

それはむづかしくよーんと効果音が聞こえてきた。どうせ

「調子、悪いの？」

「まあ、良くなは無い」

何だかんだ言って、プライドが高いのだ。

体育大会だろうが。

全国大会だろうが。

幼稚園児との徒競走だろうが。

手を抜かない。

いや、足を抜かない。

全部、本気。

だから、調子が悪いときに言い訳ができない。

「ふーん」

「ふーんつて何だよ、ふーんつて」

「だったら、一つ」褒美をつけてみる?」

は?、と間抜けな顔で聞き返してくる光輝に。

ものす"ーく意地悪い顔でいつ聞いてやつた。

「次の大会で優勝したら、『データしてあげる』

「ツツー？」

なんぢゅうつてー、『冗談ですって言おうと思つたら』

光輝が私の手を取つて。

「本當か！？ 本當なんだなーー！」

「えー？ ちよつと」

「男に『一言は無いよなーー』

「私は女！」

え？

何この展開。

何でここつ、『なんざる気』に満ちてるの？

私の計画が首を立てて崩れていぐ。

「つむつしゃーーー！ 頑張るぞーーー！」

「……馬鹿、単純」

まあ、いいや。

女にだつて、『一言は無い』。

夕焼けの下、自分の言つた事を『ちよつぱり』後悔した。

「あ

「あ

あわてて手を振りほどく。

「わ、悪い。何かかっこ悪かった

「べ、別に。練習頑張って

「ああ

そこからは、沈黙。

このとき、家が隣であることを憎んだ。
同じ道を通らなきやなんだもん。

朝から、空が泣いている。
ジメジメして、鬱陶しい。

体育大会の振替休日で今日は休みになっていた。

ちなみに、昨日の体育大会は白団が優勝している。

まあ、当然つて言えば当然なんだけれど。

「つーん、 じんなに朝つぱらから誰？」

そんな有意義な休日じんなに速く、起しあれたのかと言へば。

友達からの電話だつた。

ケータイの着メロを朝一番に聞かせれる羽田になつた。

「もし」

もし、朝つぱらから何？

つて言つてみた。

だけど、言つて始める前に。

「莉那！？」

「ちょっと、落ち着いて、やつしたの？」

酷く焦つたといつか、困惑した美優からの声によつて。
言葉によつて。

私の意識は覚醒した。

「光輝君が！ 事故つたの！？」

え？

「美優！！」

私は市内の比較的大きな病院で友達の姿を見つけた。

「どういひこと！？」

隣の、光輝の家に行つたけど、『両親は居なかつた。

何故なら。

この病院に居るから。

「えつと、あのね、」

光輝が、事故つた。

その言葉が、私の頭をぐるぐると回つていた。

「取り合えず、命に別状は無いみたい」

「良かったー」

肩の荷が降りた。

あの馬鹿、心配かけやがつて。

とことん言及してやる。

「だけ……」

「え?」

「暫く、走ることをお預けだつて

え?

ちよつと待つて!

それじゃあ、あいつ。

「暫くつて?」

震える声で、尋ねた。

「半年くら」

「そ、そんなに?」

半年つて……。

あいつが堪えられるわけがない。

だつて、あいつは。

走ることしか、能がないから。

「どういう理由で?」

「それが、昨日の真夜から、今の今まで一人で走ってたみたい」

そんなに夜遅くに?

どうして?

「やたらと張り切ってたみたい。それで、」

あ。

氣付いた。

わたしの、所為だ。

私が、あんな事言つたからだ。

言及してやるつて、私何言つてゐるの。

私が、悪いんだ。

「莉那? だ、大丈夫?」

「う、うん」

「お見舞い、いこつか

「……うん」

私は、最低だ。

「どうぞ」

「おはよー、光輝くん」

「ああ、おはよー」

二階の個室に光輝は居た。

ベットの上に倒れながら。

私たちを見て、頭を上げる。

「よつ、美優、莉那」

「お、おはよー」

光輝が太陽みたいな笑顔でこっちを向いてきた。

痛かった。
辛かった。

ちつとも、暖かくなんか無かつた。

「ねえ、光輝」「めんね。わたしの所為で

「は？」

「私があんな」と

私が頭を下げる前に、笑い声がした。

終夜が笑っていた。

凄惨な笑みを浮かべて。

「お前が誤る理由なんてないだろ

「で、でも！」

「あんなの、信じてねえよ

「え？」

「別に、あんなこと言われたから張り切つてたわけじゃねえよ

そう、凄惨に笑っていたんだ。

畳み掛けるように光輝は言つ。

「そんな事のために、頑張るわけ無いだろ？」

「……」

「俺の不注意

「最低ッ！！」

気がつけば、光輝の顔が横を向いていた。

私が頬を引っ叩いたから。

「あんたなんか、知らない」

「ちょっと、莉那！」

「かどかと、病室を出て行つた。

廊下を走らないで下さいと注意された。

だけど、止まらなかつた。

止まりたく、無かつた。

「」みんな、莉那

凄惨な泣き顔で少年は呟いた。

私が馬鹿だった。

何、調子こいてんの、私。

そうだよ、私だつて[冗談のつもつだつたんだよ。

それなのに、それなのにー。

びひじ。

(「んなに、胸が痛いの」)

涙が止まらないの。

私の所為なんて。

本当に、馬鹿だ。

自惚れにも、程がある。

あいつにとつて、私は。

ただの、幼馴染。

気が付けば、結構遠くまで来ていた。

町のはずれの方に。

一心不乱で、走り続けていた。

でも、光輝だつたらきっと、もつ県外まで走つて行つりやつてゐる。

私には、なんにも無い。

急に、そんな考えが浮かんできた。

光輝には足がある。

俊足の、足が。

私には？

（何にも、ない）

無性に泣きたくなつてきた。

ござ、泣こうとする。着メロが鳴り響いた。

嫌々、ケータイを取つた。

電話の主は、『斎藤美優』。

「もし」

もし、後にしてつて言おうとして。

またも、言い終わることなかつた。

「莉那！」

今朝よりは落ち着いてたけど。

逆に、怖かった。

言葉と、感情がずれている。

「光輝が、光輝が」

次の瞬間、信じられない単語を聞いた。

「死のうとしてるの！」

元来た道を戻る羽目になった。

あいつの所為で。

走つて、病院を目標す。

（光輝が屋上から飛び降りようとしてるの…）

あの馬鹿。

何してんの。

(『足がなくなったら、俺にはもう何にも無いって』って言ひて)

ふざけるな、と心で叫ぶ。

走るだけが取り得?

私は、知つてゐる。

光輝のいい所なんか。

嫌と言つほゞ知つてゐる。

神さま、お願ひします。

今だけ、私の足を。

速く、して下せー。

間に合わせてください。

心の中で、祈りながら一心不乱に駆けた。

アスファルトが、足に衝撃を和らげる事なく運んできた。

「光輝！」

重たい屋上の扉を開ければ、光輝がいた。

ひどく、不思議そうな顔をして。

私の登場に、驚いていた。

「ど、どうした？ そんなに息荒げて」

「どうしたって、それは」

途惑つている様にも見えた。

私の登場に、困惑してる。

それでも、笑っていた。

「光輝、死のうとしてるんでしょ

蚊の泣くような声で、言ひた。

「お前は、何でも分かっちゃうんだな
「うん、だって、幼馴染だもん」

自分で言つてて、嫌になった。

幼馴染。

「ああ、死のうと思つてた」
「何で？」
「俺の足が、もう使えないから」
「半年、半年我慢すれば」
「それじゃあ、間に合わない」

あたり前だけビ。

半年もスポーツができなければ、体は鈍る。

陸上競技なんて言つたらそれこそ一日休むだけで大きな影響が出る
のに。

半年。
六ヶ月。

それは、終わりを意味していた。

「俺の能は走ることだけなんだよ、走れなかつたら、ただのカスだ」

やつぱり、凄惨に笑いながら言つた。

走ることしか、能が、無い。

魅力が無い。
特徴が、無い。

「優しい所」

「え？」

「私が傘を忘れた時、一緒に入れてくれた」

耳まで真っ赤になりながら。

気が付けば、口に出してた。

「真面目な所」

どんなに、下手糞で、苦手なスポーツでも。

全力で取り組む所。

勉強も。

「かつこいい所」

自分が正しいと思っている事は、何が何でも貫き通す。

相手が間違っていると思ったら、本氣で間違いを正す。

『誰にでも』、優しい所。

その中で。

「私に、元気をくれる所」

どんなに、落ち込んでいても、彼は笑う。

凄惨な、笑み。

凄く、悲惨な笑みを浮かべる。

それが、
痛い。

それを見ると
私が笑ってあけなきやつて

モウ、思ひ。

辛かつたらせ、泣いていいんじやないかな」

卷之二

無理に笑わなくとも、いんたよ

それでも、駄目なら。

「私が、私でよければ一緒に泣いてあげる」「ツツ！！！」

私の背中に腕が周つた。

私よりも背が大きくて、力も強いからちょっと苦しい。

でも。

「馬鹿、じやねえのー 普通、一緒に笑って、くれるだろ?」

「残念、だけど、私は光輝みたい、に笑え、ないんだよ」

笑えない。

あんな、笑みは出来ない。

そんな顔をする前に、さつと涙が出てきちゃう。

「かつこ、悪いな、俺。『めん』

「うん、知ってるよ」

知ってる。

光輝はかつこよくない。

「でも、いいじゃん」

「ああ、どうでもいい」

彼は、いつ言った。

「お前が、莉那が居てくれるなら、かつこ悪くたつていい」

「え？」

「俺、死のうと思つたんだ。死んでやるつて」

泣きながら。

悲願するよつて。

凄惨に泣きながら。

言葉を続ける。

「そしたらさ、怖くなつたんだ
死ぬのが？」

違つ、つて。

「お前に、会えなくなるのが」

「……」

「ちつぽけで、自分勝手だよな、俺

何言つてんだか、俺と。

彼は泣きながら言つた。

「待つてるから」

「え？」

「私、待つてるから」

「……ああ、全力ダッシュで追いかけてやる

んで、隣に並んでやるつて。

彼は、笑みを浮かべて言つた。

その笑顔は、凄惨じやなかつた。

「本当っ？」

「ああ、俺のこの両足に賭けて」

俊足の、足に賭けて。

「じゃあ、安心」

安心して、待つてる。

その足なら、私の元まであつとこいつ間に来てくれる。

「莉那、俺お前のことが」

「だ、駄目ッ…」

「え？」

「まだ、駄目だよ」

クスリと笑つて、言つてあげたら。

「分かつた」

光輝に、凄惨な笑みを浮かべられた。
夕日を背に、涙目で、笑つていた。

ああ、やっぱり光輝は笑うんだ。

「めんね。

でも、絶対待つてゐから。

「さつきの、お返しだ

「え？」

「俺が弁当忘れたら分けてくれる優しい所

「ちょ！？」

「人の優しさをしつかり受け止める所

「は、恥ずかしいからやめてよ……」

「『誰にでも』、優しい所

「……拗ねてる？」

「別に」

「嫉妬しちゃつてー」

「してない」

「じゃあ、明日から光輝だけ特別に優しくしてあげよっか？」

「マジかッ！ 本当だな！」

「嘘だよ」

「……最低だな」

「じゃあ、」

私は、凄惨な笑みでいつまでもやつた。

「あんたも私を特別扱いしてくれたら、私も考える

光輝は、驚いた顔をした後。

「俺が、優勝したらだな」

「うそ、待ってるよ

実を言えば、今すぐ聞きたい。

あの、続きを。

だけど。

（両足に賭けられちゃつたから、しつかり待ってないとダメだよね）

彼がランナーなら。

私は、ゴールテープがいい。

一番に、彼の喜びを分かち合いたい。

あんたを、ゴールで待ってるから。

私を、誰にも渡さないでよ？

あんたが、一番にテープ切るんだから、ヒ。

心で、言つておいた。

(後書き)

完全に勢いで書いたので、ちょっと無理やりすぎるかも知れません。

ですが、もし、読み終わってあなたの心に『ゴールテープが見えたのなら。

まだ、はるか遠くで見えなかつたとしても。
はたまた、ゴールなんてなくとも。

走り続けることを、やめないで欲しいと思います。

きっと、誰かが待っています。
何かが待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8635p/>

俺の足に賭けて

2011年1月9日04時13分発行